千代女の里俳句館　企画展

西のぼるが描く　美のかたち

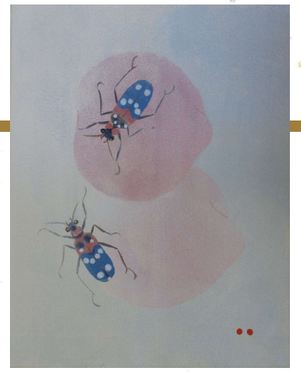
白山市在住の画家 西のぼる氏は、挿絵画家の第一人者として数々の歴史・時代小説の挿絵や装丁を手掛ける一方、現代俳画作品や、加賀の千代女に係る作品も多く世に送り出しています。特に、千代女に対する思いは深く、肖像画をはじめ、千代女の名句をイメージした俳画、千代女の旅に思いを馳せた紀行シリーズなど、テーマは多岐にわたります。

本展では、西氏が白山市に寄贈されたこうした作品の中から、選りすぐりの作品を展示し、画家 西のぼるの感性と美意識により描き出された俳句の世界観や千代女の魅力をお伝えします。

また、近年制作された作品を西氏の言葉とともに紹介します。時に仕事の枠を超え、描きたいものを心のままに描いた作品の数々は、私たちが不安定な今の社会を生きるための手がかりとなるかもしれません。これまで広く知られてきた「挿絵画家」とは一線を画す、「画家 西のぼるの世界」をご堪能ください。

「千代女句『朝々の』陶板原画」

「『加賀の千代女句集　百生や』装幀原画」



「見えないものにも生かされて」2020 年

「心にも栄養を」2020 年

「鍵」2021 年

「瓢」2020 年

特別展　松任中川一政記念美術館

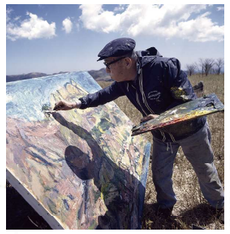
生誕130年　中川一政展　百花繚乱

芸術の魅力とその生き方

中川一政（1893-1991、文化勲章受章者）は、父が金沢市、母が白山市出身の石川県にゆかりが深い芸術家です。明治中期に東京に生まれ育ち、大正期に独学で画家を志し、昭和を経て平成の時代まで生き抜きました。その仕事は、絵画だけにとどまらず、書や陶芸、挿画や装丁、また短歌や詩、随筆など文芸にも及びます。幅広い創作活動のいずれにも一境地を拓いた足跡は、近現代画壇でも際立った存在感を放ち、その芸術はまさに「百花繚乱」と言えます。

生誕130年を記念して開催する本展では、詩情豊かな初期作から、独自の画法を模索する中期作、そして自得し花開いた円熟期を経て、晩年に至りなおも限界を定めず生み出し続けた作品を展観し、その多彩な芸術の魅力や創作姿勢に迫ります。97歳の生涯を現役で全うした生き様は、人生100年時代を生きる私たちの道標になるかもしれません。

また、本市の花「あさがお」を題材にした希少な作品も公開します。



箱根・駒ヶ岳を描く中川一政（88歳）、1981年、南川三治郎撮影

「百花撩乱」1986 年
89.0×27.5 ㎝ / 当館蔵

「芭蕉屏風」（部分）1935 年 / 個人蔵

「あさがほ」1971 年 /41.0×55.2 ㎝ / 廣澤美術館蔵

「福浦突堤」1966 年 /90.9×116.7 ㎝ / 真鶴町立中川一政美術館蔵

「駒ヶ岳」1979 年 /112.1×145.5 ㎝ / 真鶴町立中川一政美術館蔵

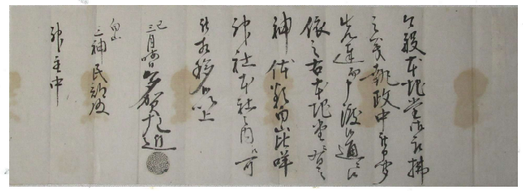
「向日葵」1984 年 /91.0×60.5 ㎝
長谷川町子美術館蔵

「唐津黒茶碗 銘 武蔵坊」
1976 年 / 径 13.3× 高さ 9.5 ㎝
真鶴町立中川一政美術館蔵

白山市立博物館　特別展

白山への道　～白山下山仏と禅定道～

白山より流れ出る水は流域の人々の生活に恩恵を与え、白山は信仰の対象となりました。養老元年（717）に泰澄が白山を開山したと伝えられ、天長９年（832）、美濃・越前・加賀、それぞれに信仰・登拝の拠点である馬場が開かれたといいます。その後、多くの人々の信仰を集めてきた白山にも転換期が訪れます。明治初期、神仏分離令の影響を受け、白山でも白山比咩神社をはじめ、白山嶺上や禅定道の仏教的施設や石仏等が取り除かれました。白山比咩神社の場合は本地堂や鐘楼等が取り除かれ、本地堂は石川郡木津村へ譲り渡され、白山山頂周辺や禅定道では石仏等が破却されたりしています。このとき壊されずに白峰や尾添に白山から下山した仏像群は「白山下山仏」と呼ばれ、現在も大切に保管されています。本展覧会では白山下山仏をはじめ、白山における神仏分離の歴史や白山信仰の文化財等を紹介し、白山信仰や白山禅定道を見つめなおします。



石川県指定文化財　本地堂取払神体類御移に付達書（白山比咩神社蔵）

紙本白描 白山曼荼羅図（那谷寺蔵）

石川県指定文化財　銅打出 金剛童子像（尾添区蔵）

石川県指定文化財　銅造 地蔵菩薩坐像（林西寺蔵）

石川県指定文化財　絹本著色 白山曼荼羅図（能美市蔵）